

(メニュー表 / 文章による雑談)

こんにちは。サークル「シーサイドブックス」の山川夜高^{やまかわよだか}です。
ふだんはブースで自分の作品について会話を交わすことが大好き
なのですが、この度の感染症流行に伴い、おしゃべりをいつもよ
り控えるため、こちらに「おしながき」には書けなかった情報を
掲載しました。作品選びの一助になれば幸いです。

INDEX

おしながき(QRコードつき)

いま、たまたま旅行記を発表することについて

対になるテーマ・観光と英雄

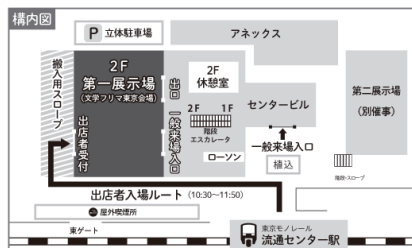
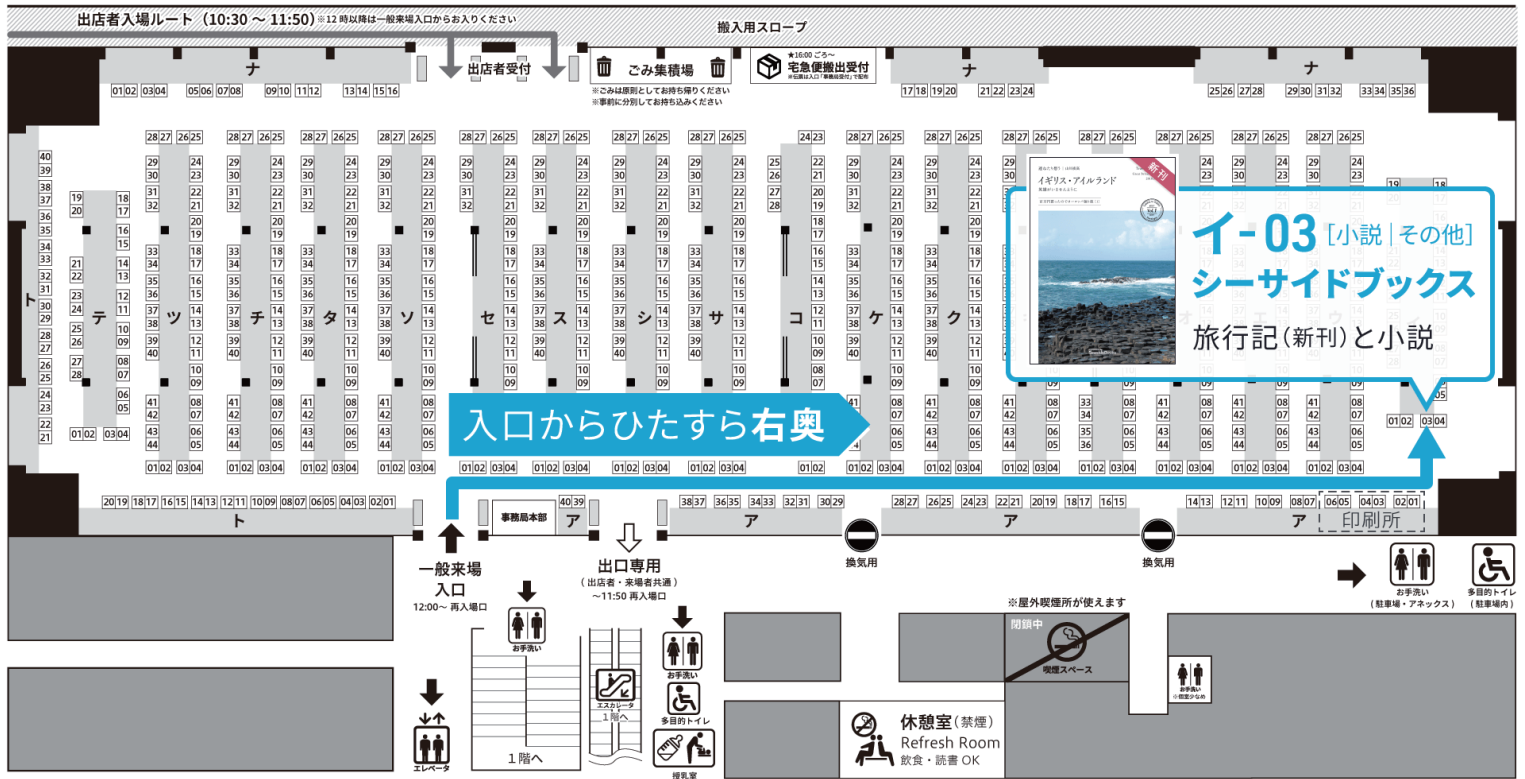
この映画が好きな人は『Cipher』も好きかもしれない

黒い本『Cipher』は、見た目ほど怖くない

えらべないよね。本は安くないし。

第三十一回文学フリマ東京 会場案内図 (東京流通センター 第一展示場/東京モノレール「流通センター」駅すぐ)

※実際の縮尺とは異なる場合があります



- 今回の重要な変更点
- 各ブース間は間をあけて配置されます。
 - 感染症対策の一環として、以下のコーナーは休止します。
【見本帖コーナー、チラシコーナー、場内休憩所、飲食販売】
 - 出店者受付 (10:30~11:50) の間の入口は奥の搬入用スロープ側に設け待機列は屋外のスロープに形成します。一時退出と再入場には出口を利用できます。12:00以降の受付と入場は一般来場入口で行います。
 - 出店者の皆様はできるかぎり時差入場にご協力ください。

文学フリマ Web カタログ+エントリーのご案内

各ブースの情報は「文学フリマ Web カタログ+エントリー」でご覧いただけます。スマートフォンからでも、出店者の情報や作品情報がチェックできます！ログインして「気になる！」を押すとマイリストに登録されます。出店者さんからは気になる！数が見えるので、作家さんの応援にもなりますよ！

第三十一回文学フリマ東京 2020年11月22日(日) 12:00~17:00
東京流通センター 第一展示場(東京都大田区) Web: <https://bunfree.net/> Twitter: @Bunfreeofficial

作成：文学フリマ事務局 (@Bunfreeofficial) 2020/10/31 版 / ★宣伝等での転載・加工等自由。自分のブースに印をつけて紹介してみましょう！

2020/11/22 第三十一回文学フリマ東京
イ-03 シーサイドブックス 発行
<https://libsy.net>
<https://c.bunfree.net/e/6WR>

いま、たまたま旅行記を 発表することについて

『連ねたり想う』の欧州旅行をしたのは2018年だったが、執筆に時間がかかり（やる気が起こらず）機を逃しつつけているうちに2020年になり、世界は疫病の世界的大流行でとんでもないことになってしまった。海外旅行は大きく制限され、ガイドブック『地球の歩き方』を発行していたダイヤモンド社が旅行ガイド事業を手放したり、「旅行記」という作品それ自体が意図せず強い時代性・批評性を帯びるようになってしまった。

私は「この作品はフィクションです。実在する諸々とは一切関係ありません」という文言は無意味な呪文だと思っている。現実に対して完全に切り離された作品は存在しない。だが、このように現実の方から思いがけず作品に距離をつめられると、どうしても面食らってしまう。

さらに今月（2020年11月）は路上生活者取材した素人のテキストがあまりにも倫理的にうかつであると取沙汰された。私は路上生活者を調査する社会学者や路上生活者への支援活動を行う専門家による当該テキストへの批判を読みながら、ヨーロッパで見かけた路上生活者たちを思い出した。ロンドンなどの都市で見た彼ら・彼女らは多くは私と同世代またはそれ以下の若者たちで、多くは就職できなかった移民であると、テキストの批判から知った。単なる観光客である私は、その場を通り過ぎるばかりで、誰にもコインのひとつを渡すことも無かったと思出した。そして自宅の最寄り駅前でビッグイシューを売っていた人から、ビッグイシューがどういう雑誌であるか知っていながら結局一度も買うことがなかったことも考えた。

何が言いたいかというと、私が書くノンフィクションにも物語にもうかつなところや悪意を自覚できない邪悪さはおそらく払拭できておらず、特に世相の変化によって現実のほうから作品に接近してくるときに、うかつさは露呈しやすい。

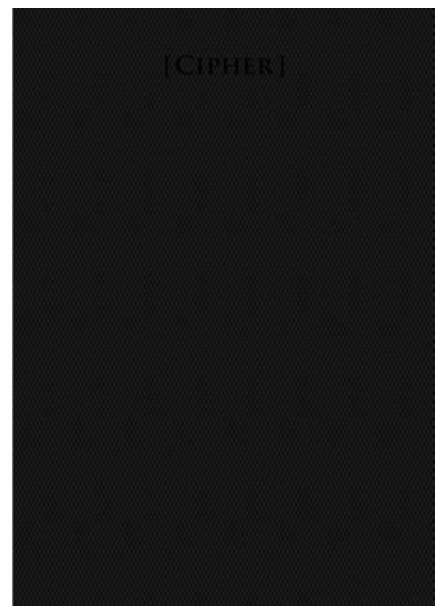
私は企画からテキストの執筆、デザインや組版作業をすべて独りで行っているの、私のうかつな部分を指摘してくれる人が善意の第三者を除いて存在しない。

この文章は「だから多めに見てくれ」という懇願や白旗ではなく、単にこれを記したほうが作品や読者に対してフェアであると判断したため書いた。（2020/11/21）

対になるテーマ・観光と英雄

アイルランド伝承のクー・フーリンにはまったのは、
英雄(スター)は衆人の期待を集める生贄だからです。
異国の「英雄の最期」を辿った散歩道が旅行記『連ねたり想う』で、
「英雄の最期」を伝える物語が『Cipher』です。
どちらもお楽しみ頂ければと願います。

『連ねたり想う Vol.1』の文中に、『Cipher』に対する言及があります。



旅行記『連ねたり想う Vol.1』

小説『Cipher』

2018年の海外旅行の日記
ノンフィクション

2014年初版制作
フィクション(物語)

通り過ぎる観光客の視点
護国の英雄(の政治利用)

観光地で生きる人々の視点
視線を集める舞台上の役者

エディンバラはグラスゴーよりもずっと坂と階段の街だった。グラスゴー市街地の道は広く、銀座の歩行者天国を思い出したが、エディンバラの道はどこも曲がりくねって狭い。曲りくねる細道を階段がつないでいる。

エディンバラ滞在中はエディンバラ・フェスティバルという芸術祭の真っ最中だった。市街地には大道芸人、音楽家、舞台芸術の客引きと、私たちが観光客が溢れかえっていた。私は2014年に発表した『Cipher』という題の小説作品を思い出した。大まかに言えば、『Cipher』は演劇産業で成り立つ架空の街を舞台に、観光客たちが持つ野次馬精神を難する作品だった。

その作品では見る／見られる関係や、見る行為が内包する暴力性や、客体化される主体（まなざされる私）といったテーマを描いた。フィクションにとってのテーマは、フィクション作品が単なる架空の与太話として宙に浮かばぬようにフィクションを現実繋ぎ止めるくさびであるかと私は考えている。『Cipher』は私の作品のなかではテーマ性が全面に出た作品だが、あれはフィクションの物語である。架空の物語に幻惑的で断定不可能な雰囲気を与えるため、舞台となる街には時代も文化圏も名前も設定しなかった。夜の夢で見たもののようにあいまいで思い出せない描写にしたかった。

私がどこでもない場所として設定した風景と似たような現実が、私の目の前に広がっていることに心がざわついた。『Cipher』執筆時にエディンバラは参照していませんので、この風景は『Cipher』ではなご。こぼれはぎした創作物の風景と現実の歴史ある街が重なって見えたことに私は本気で落胆し、自暴自棄な気持ちで街を歩いた。30年前の長田弘の旅行記（『見よ、旅人よ』長田弘、1986年、朝日選書）で、旅の感動が絵葉書

この映画が好きな人は 黒い本『Cipher』も好きかもしれない

by. 小町紗良さん（少女こなごな）

第三十一回文学フリマ東京「エ-22 少女こなごな」に出店している小町紗良さん @srxxxgrgr に考えていただきました！正直私はうち2作品ぐらいしか知らないんですが、琴線に触れるものがあれば嬉しいです。

小町紗良さんのブースにもぜひ行きましょう！



1.

作品の見せ方が近い（気がする）

トゥルーマン・ショー（1998／米）

シーヘブン島から出たことのない青年が、自分の人生や生活に違和感を抱きはじめる。「物語を消費する」ことについての映画

アーティスト（2011／仏白米）

サイレントからトーキーへ移り変わる映画界で葛藤する、スター俳優の顛末。この時代には超貴重な白黒無声映画

婚約者の友人（2016／仏独）

戦争で婚約者を失ったドイツ人女性のもとに、彼の友人を名乗るフランス人の男が現れる。モノクロで描かれる、虚構と現実の間の深淵

2.

うっすら漂うブロマンス感

インタビュー・ウィズ・ヴァンパイア（1994／米）

美貌の吸血鬼レスタの人生の伴侶として、吸血鬼になってしまった繊細な男・ルイの独白。作中の夜の空気感が『Cipher』に近いかも

シャーロック・ホームズ（2009／英米）

原作が有名すぎて言うこと特にねえなトーン抑えめのシックな画面や、19世紀英国の街並みにも親近感

映画じゃなくて漫画だけど、

not simple（著 オノ・ナツメ）

あまりにもツキがなさすぎる男・イアンを小説家のジムが静かに見守る。最初から哀しみのズンドコ

3.

『Cipher』っていうか

山川夜高作品感あるやつ

スイス・アーミー・マン（2016／米）

無限放屁水死体と無人島サバイバル!!!! いや水死体というモチーフ（不謹慎）もそうなんだけど、このフザけてるように見えて真摯で熟慮された感じが心地よい人は山川さんの作品も好きですたぶん

パターソン（2016／米）

パターソン市でバスの運転手してるパターソンさんが、犬の散歩して、妻が作ったパイ食べて、バス運転して、詩を書いて、酒飲んで、その辺の人と喋るだけ。

うっすらと浸透していく滋味深さが近いかもしれない



ご清聴ありがとうございました！
全部個人の感想だよ!!!



ありがとうございます!!!

個人的には
芸術のために他のすべてを棒に振る
狂ったアーティスト→
『ザ・ウォーク』（2015 米）

あと『ドライブ』『ラ・ラ・ランド』『ブレードランナー2049』の「かわいそうなライアン・ゴズリング」にXみを感じる（かわいそうなライアン・ゴズリングが好きだけ説）



かわいそうな顔してる時のゴズリングのしゅんとしたかわいそうな目はXたやに似てると思う（こまかすぎる）

黒い本『Cipher』は、 見た目ほど怖くない…かも



黒い紙に黒い文字で印刷されて読めない、というシンプルかつ「異常」な作品の本作『Cipher』は、Twitterでもまあまあ告知をRTされ、たぶん文学フリマに來たり小説を読むことが無いだろうな～という層にも写真で作品の概要を見て貰えます。

ただ、私はこの作品を「奇をてらった異常な本」または「物珍しいコレクションアイテム」として作ったわけではなく(マーケティング上そういう売り方をしますが……)あくまでも小説作品として作成しました。

このへんの複雑な思いは『Cipher』書籍付録リーフレットのライナーノーツに詳しく書いています。

ライナーノーツの内容はWEBでも公開しています。

<https://libsy.net/cipher/liner-notes>



あらすじ

テーマパークのように娯楽芸術が異常発達し、すべてが観光客のために詭えられた「街」。なかでも演劇は街の一大産業であり、巨大な「劇場」がその権威を掌握していた。

労働者向けの安酒場でピアノを弾くXのもとに、「劇場」の色物舞台俳優・Øが来店する。交友をはじめ二人だが、Øは日々に疲弊し、Xは離人感を抱えていた。

おもな登場人物

X……ジャズ・ピアニスト。場末の酒場でピアノを弾いて生活している。誰にでもやさしく穏やかだが、なにに対しても実感を覚えられないがらんだ人物でもある。

Ø……新進気鋭の舞台役者。美しい顔立ちと刃物を思わせる鋭い眼をもち、劇場では悪役ばかり演じている。意思と押しが強い理想主義的な性格で、趣味は料理づくり。

みどころ

終始Xの一人称視点で語られ、Xは「信用できない語り手」ではないため、山川夜高の作品のなかではかなり読みやすい小説です。

(WEB連載小説『これは物語ではない』には、あまり正気ではない「信用できない語り手」がいます) 対になる二人のの出会いは夜のピアノ・バー、華やかな観光地である「劇場」と場末のうらびれた風景の対比をお楽しみください。

執筆中に聴いていた楽曲

Bill Evansのソロとピアノトリオ、Keith Jarrettの即興・ソロ・トリオ、Antonio Loureiroのアルバム『Só』、Billy Joel『Piano man』、People In The Box、特に『アメリカ』『市場』



えらべないよね。 本は安くないし。

文学フリマWebカタログや「おしながき」を読んでもたけど、
まだどの作品を好きになれるそうか分からない。
そんな方のために各作品の要素を直感的に紹介しようと思
います。気に入った要素や気になる要素があれば、本をチェ
ックしてくれると嬉しいです。

新刊・旅行記

『**連ねたり想う Vol.1**』

B6版・フルカラー

¥2000

読めない小説

『**Cipher**』（サイファー）

文庫版・特殊装丁

¥1500

アンソロジー

『**あげぱん**』

多摩美文芸部OB会 発行

B6版

¥700

アンソロジー

『**VANITAS**』（ヴァニタス）

スイマーズ 発行

文庫版

¥400

舞台

イギリス・アイルランドの
主に都市部（2018年夏）



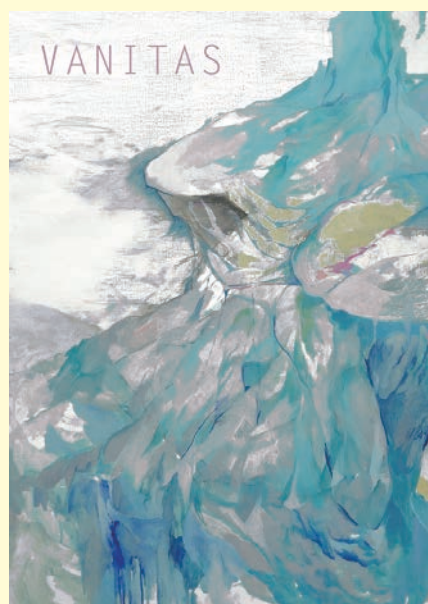
読者にとって都合の良い場所、
石畳の「観光地」



1997、初夏、渋谷、
ライブハウス。



不詳、春の海辺

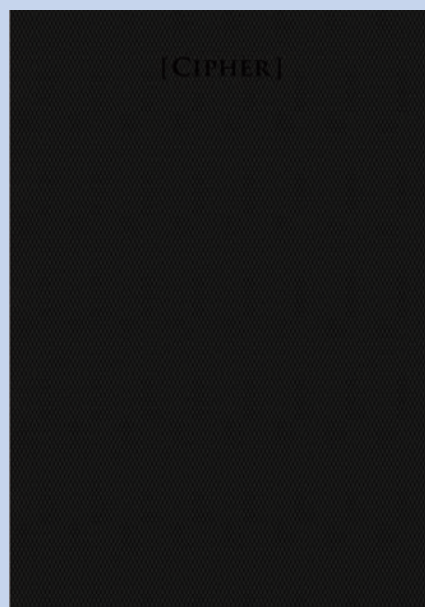


フィクションとして

ノンフィクションだろうと、
虚構と大差ないよ



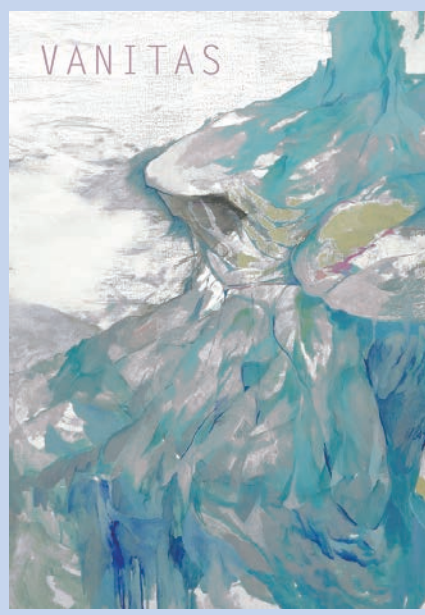
物語への批評としての物語、
物語へのカウンター



このなかでは一番素直に
物語を楽しめる小説



ガルシア・マルケス味がする
(執筆当時『エレンディア』は未読)

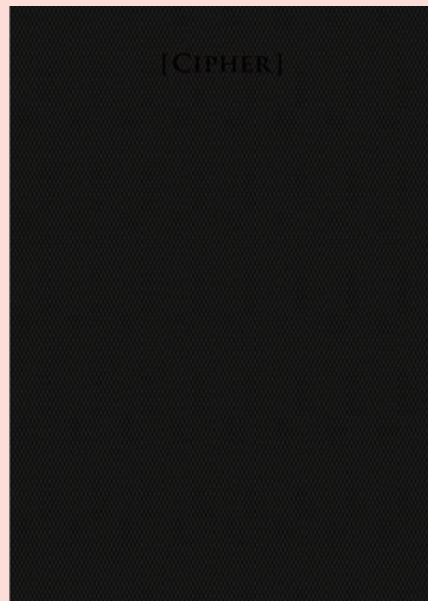


飲み物に例えるなら

片言で注文した
Flat white, please.



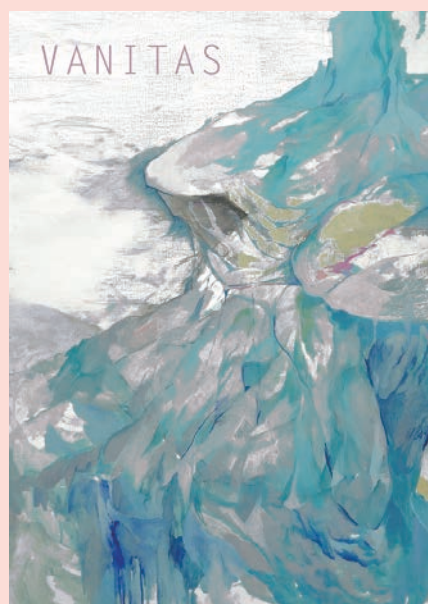
苦く濃いコーヒー または
どろどろに溶けたホットチョコ



汗ばむ初夏に流し込んだ、
強炭酸の甘いコーラ



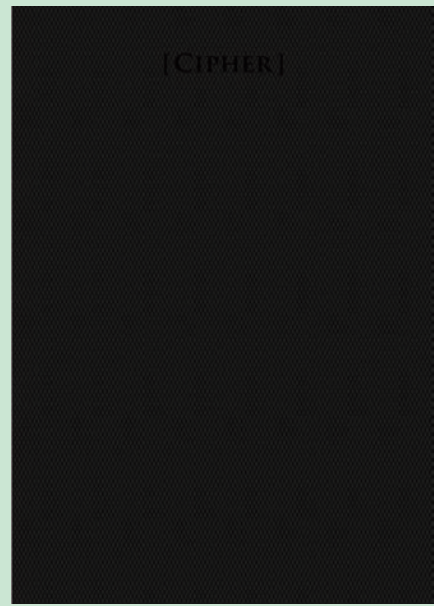
うすい茶の味、
春の海水（飲み物…?）



作中の音楽 / 音楽に例えるなら

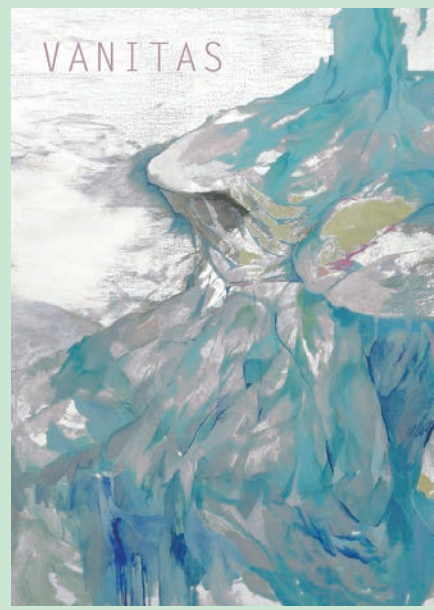
ジョン失地王が無能だから
ロックミュージックは誕生した

(ミュージシャンの物語)
平日の深夜のピアノ・ジャズ



(ミュージシャンの物語)
歪んで疾走するロック

生活音の中にかろうじて
聞こえるピアノの単音

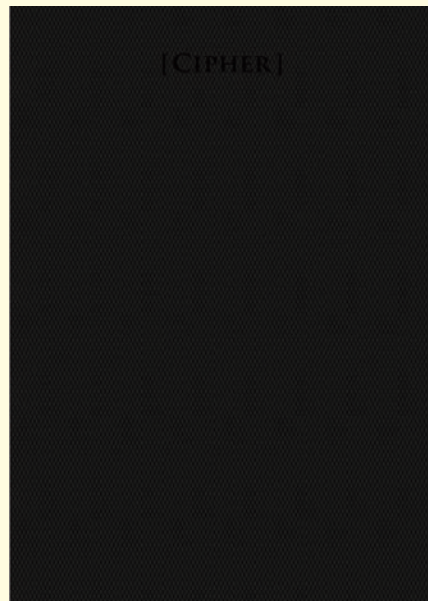


動物

ねずみちゃんといっしょ



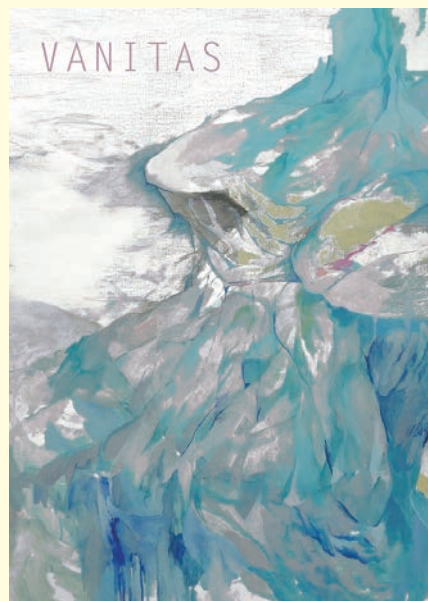
「カラスが見ている」



登場人物
ほぼ全員猫派



海の生物



お探しの作品は 見つかりましたか？

琴線に触れた作品はありましたか？

もし書籍作品にピンとこなくても、よかったらWeb連載小説
を見てみてください。

これは物語ではない

内容はタイトルの通り。妙ちきりんな普通の人々のもとに、ゆ
っくりと静かに、妙なことが起こりつづけ、何も起こらない群
像劇。一見ほのぼの系と見せかけたシュルレアリスム文学。

<https://libsy.net/disstory>



Drive to Pluto

アンソロジー『あげぱん』に収録したバンドもの『ミッドナイト・
ヘッドライト』の続編で、今はもう活動を停止した架空のロッ
クバンドの「逸話」集。

人々の眼差しを集める「スター」の「終焉」という意味で、小
説『Cipher』とはテーマが響き合います。

<https://libsy.net/dtp>

